



23歳・1983年夏季式前に



28歳・1988年四人娘と



55歳・2015年7月

院首夫人 小川なぎさ他界



59歳・2019年6月準備した遺影



妙たえの光ひかり

復刊114号

昭和35年新潟市に生まれ、県立保育専門学院に学び保育士の資格を取得後、新潟市立ひしのみ園で障がい児教育に携わりました。その熱心な姿から、今でも「先生」と慕ってくださる方もおられます。

若い頃は、ワンダーフォーゲル部に所属し、あちこちの山を楽しんだそうです。風邪一つ引かないのは、当時鍛えていたおかげ、とよく語っていました。スポーツ万能で、院首との縁も、趣味のテニス仲間を介してでした。

昭和58年の結婚後は、慣れないお寺での生活に身を置きながらも、持ち前の明るさで良く檀信徒を迎え、時には相談事に耳を傾ける姿もありました。また、料理が好きで行事の折には、美味しいお斎を皆様に振る舞おうという心にかけていました。

義母の介護と看取り、四人の娘たちの子育て、寺庭婦人としての仕事と何一つ手を抜かなかった人生だったと思います。葬儀にご参列いただけたかった檀信徒の皆様に、引導文の一部要旨をお伝えしお礼申し上げます。

法号 春光院妙養日渚大姉 行年 61歳

春光院―4月生まれで、暖かい春の日差しのような人柄。妙養―妙法蓮華經の元で子を育て、寺を育て、多くの人々に糧を振る舞い養った人生。日渚―日蓮聖人の弟子として、俗名から波が集まるように、皆さんが集える寺にした功績を譬えました。

住職 小川良恵



行事案内



がっ きおさ ふだくば

月忌納め(お札配り)

12月中に地元の檀徒宅へ、来年のお札(ふだ)を持ってお経に伺います。県外等でお札を希望される方はお送りします。

た

除夜の鐘・お焚き上げ

12月31日(木)

午後10時30分から、本堂で除夜法要。11時半ころから除夜の鐘、古いお札、しめ縄等のお焚き上げ、があります。除夜の鐘は10時から大玄関受付で整理券を配布し、どなたでも撞いていただけます。ご家族そろってお参りください。

※お焚き上げの古いお札等、当日お持ちになれない方は、事前に祖師堂の受付箱にお入れください。



年始参り

例年通りです。

1月1日(金)、2日(土)

午前9時～午後4時。玄関での受付後、住職が大広間でお待ちしています。近年は家族連れが多いのですが、今年はコロナ対策で1軒2～3名に制限し、また例年の飲食も自粛させていただきます。元旦のお茶席があります。



ほしまつ きがんふだ

『星祭り』祈願札

個人ごとにその年の星回りがあって、元旦の朝に本堂で希望者の『星祭り』を行い、1年の安泰を祈願します。家族ごとに1枚のお札(ふだ)にして1軒2千円でお届けします。

新規お申し込みの方は、家族全員の氏名、性別、生年月日を書いて12月20日までにお知らせ下さい。継続の方は申込不要です。

田村上人の水行と厄除け祈願祭

2月27日(土)、28日(日)

いずれも午前10時から。厄年の早見表は別紙チラシにあります。

例年の厄除け祈願祭に合わせ、今年は寒百日間の大荒行を終えた田村上人が水行を行います。厄年以外の方も「家内安全」等お受けいたします。同封の返信用ハガキにてお申込みください。



信行会とボランティア

1、2月の「月例信行会」とボランティアはお休みです。次回は3月7日(日)「信行会」、3月15日(土)「ボランティア」です。「お寺でヨガ」は3月までお休みです。

あとがき

今号は、院首夫人なぎさん追悼号です。なぎさんは本当に唯一無二の人でした。飾り気のない温かさに満ちていたので、一緒にいるとそれだけで安心したものです。今もお寺のそこそこに、なぎさんの心が息づいているように思えます。なぎさん、ありがとうございました。(新倉理恵子)



「南無妙法蓮華經」に感謝を乗せて “小川なぎさ”さんを送る

21日はさわやかな秋晴れ、翌22日は曇り空でした。開け放たれた京住院のご本尊の前に、明るい縞の紬の着物を着て赤い帯を締めたなぎささんが眠っています。この日のためになぎささん自身が詠えた衣装です。その傍らに住職と院首が座り、弔問のお客様を迎えました。

庭に置かれたパネルには、亡くなる6日前の写真、2年8ヶ月の闘病の経過報告と医療スタッフへの感謝の言葉が掲示されました。「あまりに早すぎる」「面変わりしていないねえ」「この写真はいつものなぎささんだ」パネルの前に立ち止まり語り合う皆さんの姿がありました。「ずっと支えてもらっていた」と枕頭で泣き崩れる方も少なくありませんでした。京住院では2日間でのべ1,000人ほどの方々に弔問していただきました。

22日(木)夕方、京住院で納棺が行われ、棺は檀徒役員の手で本堂に移されました。ダライ・ラマ14世から頂いた白い絹布を縫い込んだ`棺掛け、が、棺に掛けられます。通夜・葬儀の導師は、鎌倉・圓久寺の松脇行真上人です。

通夜式の`導師法話、で松脇上人は、昨年なぎささんから「まっちゃん!私のお葬式よろしくね!!」と明るく頼まれたと話し、「通夜・葬儀の法要では亡き人を思い出して感謝をお供えします。お題目を唱えるときは、音は`南無妙法蓮華經、ですが`なぎささん、ありがとうございました、の思いを乗せて唱えました。」と語りました。

23日(金)、葬儀の日は雨でした。この日は、偶然にも院首となぎささんの37回目の結婚記念日でもあります。なぎささんの親友である戸田妙寿上人(千葉・遠寿院住職戸田伝師で令室)は37年間の交流を振り返り、「英爾上人が病床のなぎささんを最期まで守ってくれた。なぎささん、良い友人であってくれてありがとう」と弔辞を結びました。

出棺のときには、感謝の思いをこめた「南無妙法蓮華經」の声と団扇太鼓の音が本堂いっぱいに響きました。棺は檀徒の皆さんに抱えられ、お題目に包まれて雨の院庭を出ていきました。

謝辞で住職は「本当に温かい自慢の母でした。これからは父と2人で妙光寺を護持してまいります」と涙に詰まりながら決意を述べ、院首は「喪失感はあるが、同じように妻を見送った先輩方を見習っていきたい」と語りました。最後に、なぎささんのお母様・飯塚マツエ刀自が「私の産んだ子が立派なお寺に嫁ぎ、皆さんに支えられて密度の濃い一生を送ることができました。娘は全うしたと思います。ありがとうございました」と挨拶しました。

(編集担当・新倉理恵子記)

*告別の儀 10月21日(木)13時～19時
22日(木)13時～16時
*通夜式 22日(木)18時～19時
*葬 儀 23日(金)9時45分～10時45分
*出 棺 11時15分



告別の儀



告別の儀 記帳する弔問客



告別の儀 住職と小川院首



「京住院」前で「経過報告と医療関係者へのお礼」を読む弔問の方々



通夜式



通夜式で挨拶する小川院首



葬儀式



葬儀式で挨拶する良恵住職



出棺前の親族とのお別れ



出棺



出棺での遺族挨拶



ご報告とお礼

院首(前住職)
小川英爾

10月15日妻小川なぎさが、行年61歳で他界いたしました。23歳で私と結婚して以来37年間、精一杯お勤めさせていただきました。大胆にしてみよ、常に向きで笑顔を絶やすことなく、檀信徒はじめ地域の皆様からも慕っていたきました。2017年11月に住職交代し、その翌年2月に緊急を要する胃の進行ガンと診断され、3月に手術、7月には転移が認められ抗がん剤治療を始めました。

発病からの2年8ヶ月、病状は厳しく、皆様とのマレーシア団体参拝、家族揃っての沖縄滞在、私と二人の温泉旅など数々の思い出作りをしなごらの闘病生活でした。故人も家族や皆様とのあまりに早い別れは寂しいと申しておりました。しかしこれも定命と受けとめ、語り合いながら覚悟のうえで一日一日を大切に過ごしてまいりました。

最期は共に苦勞し、慣れ親しんだここ妙光寺で迎えたいとのたつての希望でした。「娘がお坊さんになったでしょ。だから僧侶として人間の最期をしつかり看取れるよう経験させるのも親の勤めだと思つたの」お見舞いいただいた松本市神宮寺の元住職高橋卓志さんの問いかけに、明るく応えています。

幸い個人的なご縁もあり在宅訪問診療医と病院主治医を中心に、実に6人もの先生方が連携し熱心に治療に携わって下さいました。「なんて

贅沢な患者」と喜び、「なぎささんの人柄ですよ」とすべての先生方に言っていたきました。

痛みの抑制もできて、亡くなる数日前には境内を車いすで散策し「気持ちいいわねえ」と話し、介護休暇中の娘たちと夕食を賑やかに楽しみました。その後2日ほど前からモルヒネの増量で意識が遠のき始め、15日夕刻「お父さん」と、2度私を呼びました。やがて一時荒かった呼吸も穏やかに住職は夕食作りに立ち、他の娘は買い物に出かけました。私がすぐ脇のベッド用テーブルに酒とつまみを置いて「晩酌して良いか?」と語りかけると、うなずいたように見えたのです。二口三口杯を口にして「あれ」と思つたら、呼吸が停止していました。本当に静かで穏やかな最期でした。

コロナ禍で通夜葬儀へのご参列は制限させていただきましたが、事前設けた期間に大勢の皆様からお別れを、また遠隔地の方々からも沢山の弔意をいただきました。この後は「靈山浄土」へ参ります。あの爽やかな風に吹かれて、心置きなく楽しい修行の日々を過ごし、家族や皆様方を見守りまた再会できるものと確信しています。

公私ともに大変お世話になりましたことを、故人に代わり心からお礼申し上げ、併せて引き続き若い住職のご指導ご支援を賜りたくお願い申し上げます。



亡くなる6日前



50歳・2010年上海団参



30歳・1990年第1回フェスティバル安穩



院首夫人小川なぎささんに聞く

―病気でひと休みしています―



院首夫人なぎささんといえば、「妙の光」では人気コーナー『渚から』（二〇〇号までは『寺庭から』）の筆者としておなじみです。お寺ではいつも台所を守り、妙光寺のディフェンダーとして活躍してきました。

法灯継承を終えた矢先に大病を患い、今までとはひと味違う夏を迎えたなぎささんに、お話をうかがいました。

Q 胃がんと聞いて、びくつきしました。皆さんも心配されていると思いますので、まず病気のことを聞かせてください。

なぎさ 3月13日に手術をして、胃の3分の2を取りました。今は抗がん剤治療をしています。

Q いづころから具合が悪かったんですか？

なぎさ 仕事をしていると夕方胃が痛くなることがあって、お正月の1月2日は休んだんですね。今思えば、行事がある時に休んだことはなかったの、かなり辛かったんだと思います。検診は5年に1回くらい受けていたのですが胃

カメラは飲んだことがなくて、2月半ばに内科の先生のところに行つて胃カメラを飲みました。そしてすぐに大きい病院を紹介されて、あつという間に入院して手術しました。

Q 胃がんと言われて、ショックだったでしょう？

なぎさ 意外に平気だったんですよ。お寺で長く暮らして、いろいろなお話も聞いているので、そのおかげかもしれない。でも入院前に、3月のお彼岸のことを頼みに大滝総代のお宅に行つて、奥さんの幸子さんが涙をこぼしながら「いいよ、何も心配しなくても。私たちがやっておくから、まかしといて」と

肩を抱いてくれた時は涙が出ました。自分の病気のことというより、幸子さんの優しさに涙が出ましたね。そういうことは病気になるまでなかったです。皆さんは本当に優しく、私も人に優しくしなくてはと思いました。

Q それでは、話を変えて、院首さんとのなれそめを聞かせてください。

なぎさ 私は新潟市の公立保育園で、保育士をしていました。仕事は楽しかったし充実していました。それで友達に誘われて、仕事帰りに少し運動しようとしてテニスクールに行つたんです。そのスクールの同じクラスに現院首がいまし

た。私が23歳で、院首は31歳の時でした。クラスの飲み会の時に、角田山の麓のお寺だと知つて盛り上がりました。

実はその頃は登山が趣味で、週末ごとに山登りに出かけていました。角田山は新潟では有名な山で、登山コースもたくさんあり雪割草が咲くことでも知られています。院首から「遊びにおいでよ！」と言われて、さっそく出かけました。原付バイクでトコトコ走つてね。

『山菜を食べる会』に行つたのが、最初だったと思います。その頃の院首は「寺子屋の会」というのをやっていて、おもしろい人たちがたくさん集まっていた。私の知らない世界がある！という

感じで、集まっているおじさん達と話しているのが楽しかった。そうこうするうちに、結婚することになりました。

Q お寺に嫁ぐということについて、院首さんから説明は？

なぎさ 何もありません。（笑）私の両親は「お前に務まるわけがない」と反対しました。登山ばかりしている娘でしたから、心配だったんでしょうね。1983年の10月に結婚して、翌年の夏には現住職の良恵が生まれました。

Q 結婚してみても、妙光寺の生活はいかがでしたか？

なぎさ 今思えば、大変だったと思います。年離れた義母もいましたし、良恵の生まれるころには中学生の鎌田上人が夏休みに初めて住み込み修行に来ました。そして年子で4人の娘が生まれて一番下は双子です。その上、ユースホテルもやつていてお客さんが来るわけです。数年に1回は境内が水害に遭います。まず水路を作らなくては、ということでは院首を手伝つて測量をして仕事をしました。そんなこんなで、いつもたくさんの人たちがお寺にいます。スーパが遠いので買い出しも大変だし、お風呂が外の小屋にあって手間もかかりました。でもユースホテルに泊りに来た若い人たちが手伝ってくれた

りして、私は忙しさをあまり苦勞とは感じませんでした。

Q では、そのころ一番大変だったことは何ですか？

なぎさ お坊さんが夫ひとりだけだったことかな。葬儀の連絡が入ったとき夫がいないと、すべての段取りを私がひとりですることになります。お手伝いによそのお坊さんをお願いすることもありました。葬儀は大切だから緊張するし、携帯もないころですからあちこち連絡をとるのは大変でした。

Q その後「安穩廟」ができて、ますます忙しくなりました。若いなぎささんを支えたものは何ですか？

なぎさ いろいろな人との出会いが宝物です。普通の人の3倍は、人との出会いがあったと思います。「安穩廟」の設計者だった野沢先生は大好きな方でした。それから工事の職人さんが入ると当時は食事をお寺で用意していました。が、私は台所でお茶を飲みながら職人さんと話すのが好きでした。職人さんの話は面白いですよ。だから職人さんの食事の支度も、負担に感じたことはありません。つらいことより良かったことの方が、たくさんあった気がします。

Q 昨年、良恵上人が法灯継承をしましたね。

なぎさ 後を継ぐと聞いた時、最初は反対しました。心配が先に立ちました。2人でもこんなに大変だったのに、独身の良恵は1人で頑張らなきゃいけない。やつていけるのか。でも、私たちも困っていることがあると、ご縁があつて助けて下さる方が現われました。きつと住職も、そういうご縁に出会うだろうと、今は思っています。

Q なぎささんの病気に一番慌てたのは院首さんでしたね。毎日病室に通っていたそうですね。

なぎさ そうなんです。入院中は毎日9時に病院に来てくれて、夕方まで病室にいてくれました。夕方になると「晩飯のおかずを買わなくちゃ」と言つて帰つていきました。きつと家にいても落ち着かなかつたんでしょう。2人きりで長時間過ごすのは、結婚以来初めてでした。法灯継承前だったら、こうはいかなかつたと思います。住職を引退したところだったので、タイミングが良かったんです。入院の前から、料理を教えたくれと言つて練習していました。凝り性だから覚えは早くて、けっこう上手です。退院後も、朝は食事の準備をしてから起こしてくれます。いつも体

調を氣遣ってくれるんです。

Q 院首さんは、台所でも率先して後片付けをしています。びくつきしました。

なぎさ 変わったでしょ？ 家事に目覚めてしまったようです。やるとなると、掃除も早くてテキパキしています。時々、捨ててはいけない物も捨ててしまいますけど。（笑）本当に優しく看病してもらつて、感謝しています。実は、今までたくさん不満もありました。でも今は、すべて水に流せる感じがです。病気をしたおかげですね。

Q まだしばらくは、療養が必要ですね。

なぎさ そのようです。抗がん剤治療はしばらく続くので、とりあえずお休みをさせていただくことにしました。『渚から』も、しばらくは休載させていただきます。皆さんがお寺においで幸いお手伝いに来て下さる方もできたので、安心していきます。のんびり休ませていただいて、また元気になったら復帰しますから、よろしくお願いします。ゆつくり休んでください。今日はありがとうございました。（聴いた人 編集部・新倉理恵子）

渚から 小川なぎさ

りょうぜんじょうど

霊山浄土で会いましょう！
元気？ のご報告

インド霊鷲山からの風景(2015年の団体参拝で)

おかげさまで、穏やかな毎日です

寒くなりましたね。いかがお過ごしですか？

昨年病気で休ませていただいてから色々のご心配をおかけしました。おかげさまで、今は治療をしながら穏やかに毎日を過ごしています。癌という病気を誤解して、再発したときには「もう死ぬんだな」と思って大騒ぎをしました。(死ぬ死ぬ詐欺といっているのですが) 恥ずかしくて穴があったら入りたいほどです。

行きたかったところに旅行をしたり、食べたいものを食べに行ったり、院首さんとも長い時間を過ごし、家族が集まる時間も増えました。あせるようにやり残したことを考える毎日でした。割と冷静だったと思うのですが、今考えれば混乱していたのでしょう。この1年半をやり直したい(笑)

行事においでください

お寺のことはみなさんが支えて下さいました。もう私がいなくても大丈夫です。行事も減っていません。スタッフの負担は増えたかもしれませんが、頑張ってくれまし



た。若いスタッフが
増えたので、より気
楽な雰囲気のお寺に
なっています。役員
はじめ、皆様のお力
は多大なものでした。
お願いがあります。
行事のたびに地区当

番の方々が美味しい食事を用意しています。ところが最近は行事に参加する人が減って少しがっかりなので、どうぞお参りに来ていただけませんか。よろしく願います。

今日一日を大切に

私の現在の状況は、薬での治療が中心です。抗がん剤は効き目がなくなると次の薬に変わりますが、今は4個目の薬を継続中です。リンパ節に転移をしているのでステージ4ですが、体重も減らず、副作用のないときは普通に暮らせます。癌が治ることはもうなさそうですが、現状のまま持ちこたえればまだまだ生きられるようです。

まだ還暦前なのに、自分の死がとても身近になってしまったこの出来事。お寺という死が特別なものではない環境のなかで、当たり前のように死を語れる僧侶が家族にいたこと、たくさんの先輩が旅立って逝かれたこと、インドで法華経信者が死後に行くと言われた『靈山浄土』の下見が素晴らしかったこと、さまざまな経験が糧になり案外すんなりと死を受け入れることができています。

「死ぬのも生きるのも辛いな」という気持ちになったとき、とりあえず今日一日を平穩に穏やかにと願いつつ。人間は致死率100パーセント——その大切な一日を過ごすつもりで。

あと病気は本人より家族やまわりの人の負担が大きいので、なるべくわがままを言わず、出来ることは自分でやり、いつもにこやかに。

すべての皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。

寺庭から

小川なぎさ



更年期障害？

気が付いたら、この「寺庭から」という欄も20回を越えてしまったようです。その時の気分できりとめの無いことを書くばかりでしたが、読んで下さった後で、感想やら励ましのお手紙をいただいて、いつも本当に嬉しく幸せに思っていました。ありがとうございました。

当時まだ小さかった娘たちも、長女は中学生になり、月日の経つはやさに驚いています。

自分自身にも体力や気力の衰えを感じたり、最近はどうも体調がすぐれず、早くも更年期障害かしら?なんて思うほどです。そんな時は何をやってもうまい具合にいかなかったり、記憶力もおちて、なんだか毎日薄ぼんやりと暮らしてしまいます。

草取りも犬の散歩も、汚れている部屋の掃除もできなくて、運動不足で体はむくむし、そのことがいっそうのストレスになって、最悪このまま死んでしまうのではないだろうか……なんて馬鹿げたことを考えてしまいました。

閉め切った部屋のなかで、蒲団にくるまり、もし自分の命があとどのくらいと決められていたらどうだろうか? と思ってみました。そんな時、考

えるのは子どもの世話がこまるとか、たくさんの動物たちをどうしよう、お寺の留守番や行事の心配などで、あまり自分自身の生き方に触れるような事は思いつきませんでした。きっとこれが母であり、妻であることなのかなという気もしますが、あまりこの世に執着がないのか、あきらめの気持ちなのか、悔いがないのか、なんでしょうね。

今は、徐々に体調も回復してあんなに落ち込んでいたことなどどうそうになりましたが、時々自分が消えてしまう事を考えるのは役に立つと思いました。改めて今の生活をありがたいと思いますし、やっておかねばならないことも見えてきました。

そんなわけで、今までのことをしみじみお礼を
言わなくては、と思った次第です。あと5年もし
たら今回の文はまったくばかげていたと笑ってし
まうことでしょう。

毎日の暮らしに疲れ、いつもいつも人のために生きているだけじゃないのかと、半ばやけくそに過ごしていたのが、実は悔いのない人生を送る事につながっているのではないかと、そう考えたこの初夏の出来事でした。